第１章

鹿角地域の概要

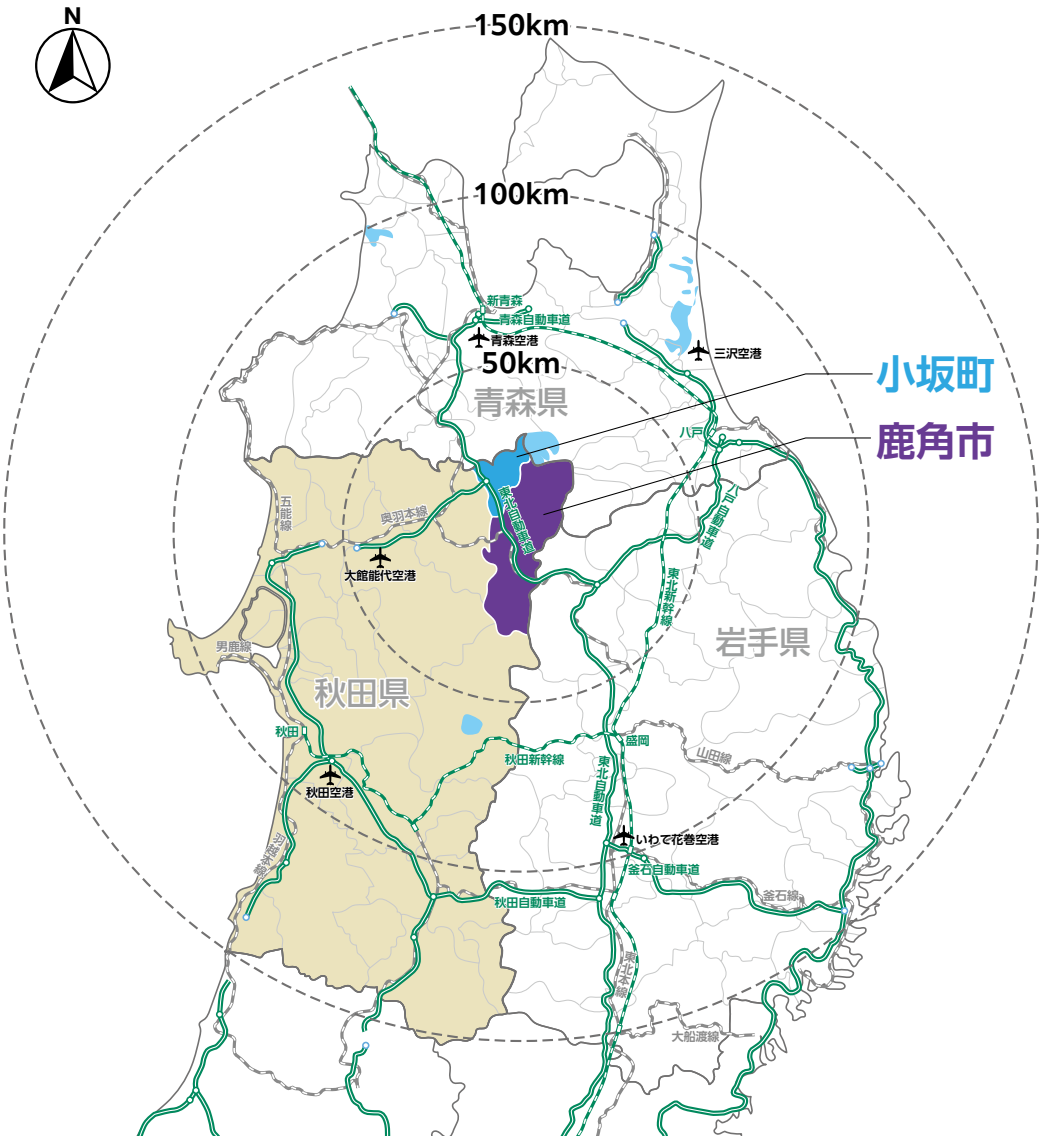
１節　自然的環境

１．位置

鹿角地域は、北東北3県のほぼ中央、秋田県北東部に位置する。北は青森県、東は岩手県に接する。鹿角地域は東西41.2㎞、南北76.9㎞と南北に長く、総面積は909.22㎢（鹿角市707.52㎢、小坂町201.70㎢）で秋田県の総面積（11,637.52㎢）の7.8％にあたる。

広域交通網として、東北自動車道が道路網の骨格となっており、青森市・弘前市・八戸（はちのへ）市・盛岡市・秋田市といった主要都市と2時間圏内で、大館能代（おおだてのしろ）空港（北秋田市）・青森空港（青森市）とは1時間圏内で結ばれる。また鉄道はＪＲ花輪線が整備され、鹿角花輪駅から盛岡駅まで2時間で結ばれる。

●鹿角地域の位置



2．地形・地質

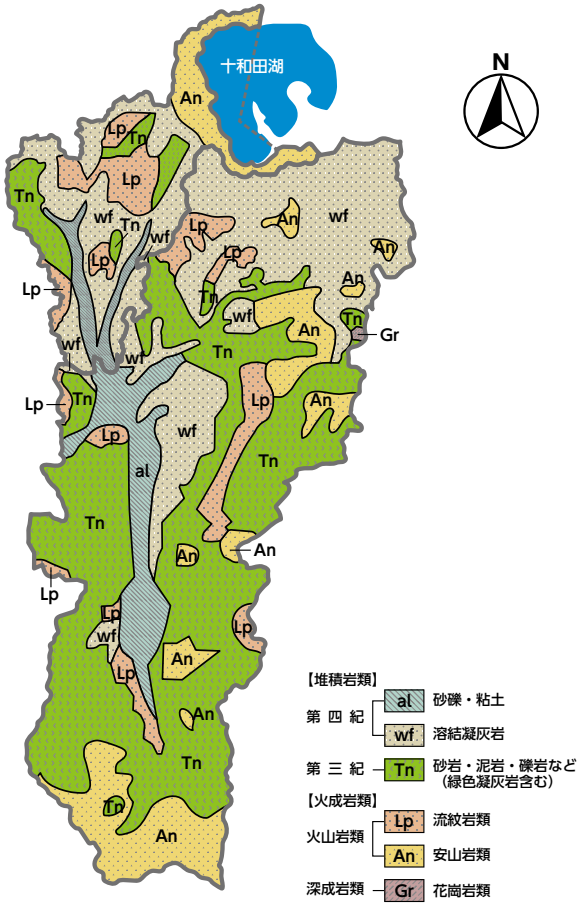
山並み
（八幡平地区）

鹿角地域は秋田県北部を日本海に向かって貫流する米代川の最上流域にあたり、東北地方の中央部を縦貫する奥羽山脈の西麓の花輪盆地（鹿角盆地）に位置する。北部の白地山が1,034m、米代川の水源地である中岳が1,024m、南部の皮投岳が1,122m、続く五ノ宮嶽が1,115m、それらの奥にそびえる八幡平が1,613mなど標高1,000mを超える山並みに囲まれて花輪盆地（盆地内の標高100～150m）が開けている。その様子は、近代の詩人石川啄木によって「青垣山を繞らせる天さかる鹿角の国」と詠まれた。鹿角地域は8割を林野が占める中山間地域であり、米代川（大館市との境界付近の標高80m）とその支流である大湯川、根市川、熊沢川などが流れ込む花輪盆地に形成された扇状地性低地は農業生産の中核となり、低地を縁取る台地は果樹や畑作地として利用される。これらの低地や台地を囲んで山地が分布しているが、鹿角地域の北部と南部は火山地であり、大きな括りではそれぞれ八甲田-十和田火山地域、仙岩火山地域と呼ばれる。北海道から北関東にかけて分布する那須火山帯に位置する鹿角地域は、十和田や八幡平、秋田焼山など総じて火山活動に影響されて形成された地域であり、盆地の骨格の一部が緑色凝灰岩（グリーンタフ）である。また大湯・湯瀬・八幡平などの温泉、大小60を超える鉱山など天然資源に恵まれた地である。

鹿角地域の表層地質は、新第三紀層の砂岩・泥岩・礫岩など、第四紀層の砂礫・粘土及び溶結凝灰岩、さらに火山岩類の流紋岩類、安山岩類などから形成される。このうち火山岩類である流紋岩類と安山岩類は地域の各所に散在し、特に安山岩類は南部の八幡平地区にまとまって分布している。この一帯は第四紀火山活動のエネルギー源を地底に温存しているため、硫化水素や二酸化硫黄の火山ガス、高温の蒸気が各所で噴出している。火山地帯は北部の十和田湖に火山の噴火と陥没により形成された地帯があって、表面地質の分布は溶結凝灰岩が大勢を占める中、流紋岩類や安山岩類が散在する。

●地形図・地質図

資料：鹿角市『鹿角市地域防災計画』及び「国土地理院地図」をもとに作成



資料：経済企画庁「土地分類基本調査-表層地質図Ⅱ」（東北地方）

3．気候

鹿角地域は、山並みに囲まれた内陸盆地で、秋田県の沿岸地帯に比べると、年間を通じて昼夜の気温差が大きい。風向きは西寄りに偏り、風速は弱く、年平均気温は9.5℃であり、内陸的な盆地型気候に属す。

鹿角地域気象観測所の平年値を沿岸部の秋田市にある秋田地方気象台の平年値と比べると、鹿角地域は年間降水量（秋田市1741.6mm）が少なく平均気温（秋田市12.1℃）も低い。日最高気温（秋田市15.9℃）と日最低気温（秋田市8.5℃）の較差（秋田市7.4℃）や降雪の深さ合計（秋田市273cm）が大きく、平均風速（秋田市4.3m/s）や日照時間（秋田市1527.4時間）の値は小さい。

気温の寒暖差は、りんごや桃といった果樹栽培が根付いた要因となった。

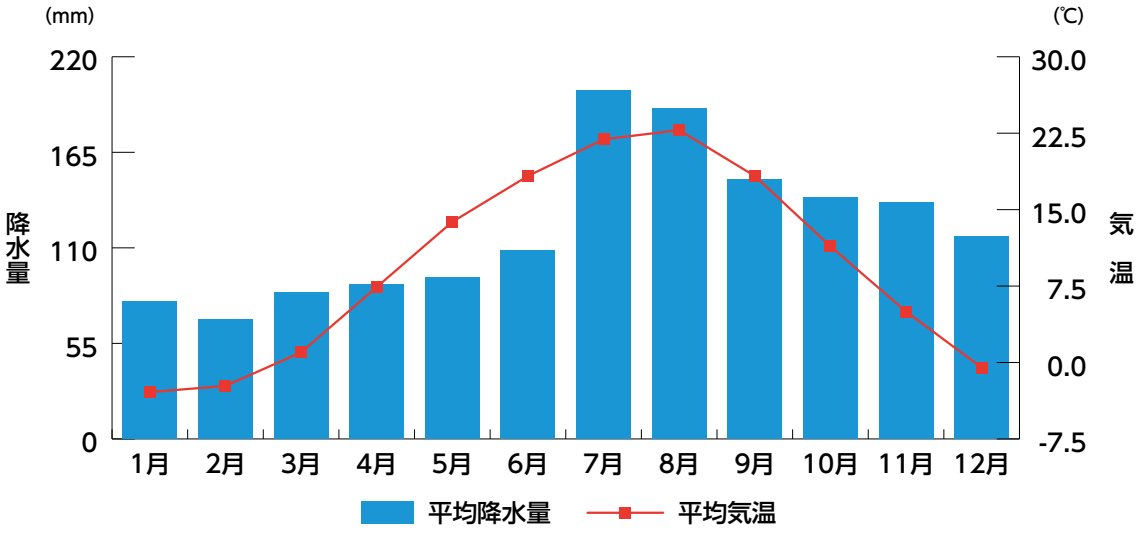
近年は、局地的な豪雨や長雨による災害が発生し、農地への被害や法面崩落などが生じ、文化財への影響も危惧される。

●気象状況（鹿角地域気象観測所における1991年から2020年の30年間の平均値）

	降水量（mm）	平均気温（℃）	日最高気温（℃）	日最低気温（℃）	平均風速（m/s）	最多風向	日照時間（時間）	降雪の深さ合計	最深積雪（cm）
1月	79.4	-2.9	0.6	-7.1	1.8	西南西	52.2	182	56
2月	68.7	-2.3	1.7	-6.9	2.0	西南西	72.0	150	69
3月	84.1	1.0	5.8	-3.7	2.1	西南西	118.5	100	50
4月	89.2	7.4	13.6	1.6	2.2	西	158.4	2	3
5月	93.1	13.8	19.9	8.0	2.0	西	185.3	0	0
6月	108.3	18.3	23.8	13.4	1.7	西北西	174.0	0	0
7月	200.6	21.9	26.8	17.9	1.5	西北西	147.0	0	0
8月	190.4	22.8	28.1	18.5	1.3	西北西	168.2	0	0
9月	149.3	18.3	24.0	13.6	1.2	北	146.7	0	0
10月	138.8	11.4	17.4	6.3	1.3	西南西	132.9	0	0
11月	136.0	5.0	10.1	0.7	1.5	西南西	87.6	13	6
12月	116.3	-0.5	3.0	-4.1	1.7	西南西	52.8	132	36
年	1454.1	9.5	14.6	4.8	1.7	西南西	1495.6	579	71
秋田市の平年値（年）	1741.6	12.1	15.9	8.5	4.3	南東	1527.4	273	37

資料：気象庁「過去の気象データ検索」をもとに作成

●鹿角地域の各月の平均気温と平均降水量（いずれも1991年から2020年の30年間）



●近年の主な風水害

発生年月	種類	被害
昭和31(1956)年7月	水害	花輪地区120mm、八幡平地区200mmの豪雨により、銭川温泉、玉川・両国両鉱山住宅2棟全壊、熊沢川に架かる全橋梁流失、橋梁3か所損傷、護岸決壊2か所、水田10町歩以上冠水。
昭和36(1961)年4月	洪水	異常高温による雪解けと暖風に豪雨が重なり、花輪地区で橋梁1棟流失、護岸決壊2か所、八幡平地区で水田4,040ha冠水。小坂地区で橋梁1棟流失。
昭和40(1965)年9月	台風	能代沖を通過した台風23号は風速20㎧の強風を伴い稲の倒伏45ha、果樹の落下2万箱の被害。
昭和41(1966)年8月	水害	小坂地区川上区域で河川増水により住家1棟流失、土木及び農地被害37か所。
昭和47(1972)年7月	水害	大雨により道路決壊21か所、堤防決壊15か所、田畑流失。
昭和50(1975)年8月	水害	小坂地区を中心とした集中豪雨により建物被害、農林水産・土木・水道関係に被害。
昭和54(1979)年3月	大雨	暴風雨により土木施設33件、農林施設26件、文化施設11件、建物破損80棟以上。
昭和55(1980)年4月	大雨	大雨及び融雪により堤防決壊25件、道路決壊3件、家屋の一部破損2件、田圃の流失3町歩。
昭和56(1981)年8月	台風	台風15号により家屋全壊15棟、半壊10棟、一部損壊100棟以上。
平成 3(1991)年9月	台風	台風19号により重軽傷者多数、住宅被害826棟など。
平成19(2007)年9月	集中豪雨	秋田県北部を中心とする集中豪雨により住家床下浸水72棟、水田の流失・埋没21.6ha、冠水156haなど。
平成25(2013)年8月	集中豪雨	秋田県北部を中心とする集中豪雨により床上浸水24棟、床下浸水189棟。
平成27(2015)年2月	雪害	豪雪により人的被害あり(死者複数、重傷多数、軽傷あり)、建物被害(住家被害49件、非住家59件)。
平成29(2017)年7月	水害	東北・北陸地方を中心に大雨が降り、住家床下浸水11件、道路関係35件、農作物関係60件。

資料:鹿角広域行政消防本部『令和5年版　年報』及び鹿角市『鹿角市地域防災計画』をもとに作成

4. 動植物

鹿角地域は標高100～200mの平地から1,000～1,600mの高山まで広がり、低地の植物から亜高山帯の植物まで多様な植生がみられる。南北にある十和田八幡平国立公園では森林生態系の保全が図られ原生的な自然が遺されている。また、鹿角地域は奥羽山脈の山並みに囲まれた内陸的な盆地型気候で積雪が多く寒気の厳しい地帯であり、日本海側型の特徴を持つ植物が多く見られる。一部地域では太平洋側に分布の主体があるミヤマザクラ・エゾノシロバナシモツケも生育する。

森林面積は鹿角地域総面積の8割近くを占めている。標高600m付近までコナラ・ミズナラ・クリなどを主とした二次林とスギ・カラマツ・ニセアカシアなどの植林が広がっている。山地の草地にみられるムラサキは紫根染の材料であり、地域社会を取り巻く状況の変化により現在では絶滅危惧ⅠB類に指定されている。鹿角地域の北部に位置する十和田湖の外輪山にはミヤマナラ・ナナカマドなどの低木林もある。南端の十和田八幡平国立公園の八幡平地域は複数の火口で形成された湖沼や湿原が点在する。ブナ群落は標高1,200mまで続き、標高1,000m付近からはダケカンバやオオシラビソ(アオモリトドマツ)と混生する。

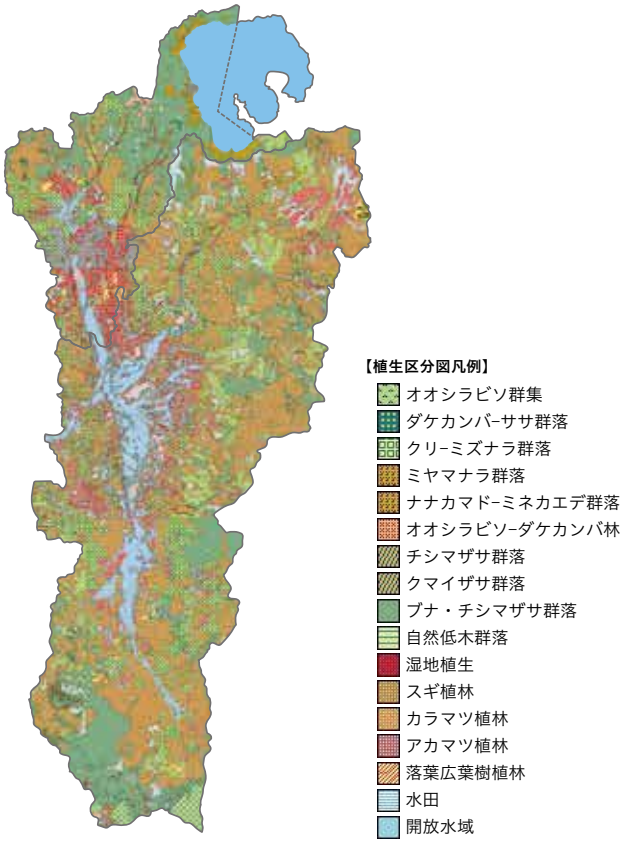
大場谷地湿原
(八幡平地区)

トミヨ(トミヨ属淡水型と推測)
(花輪地区)

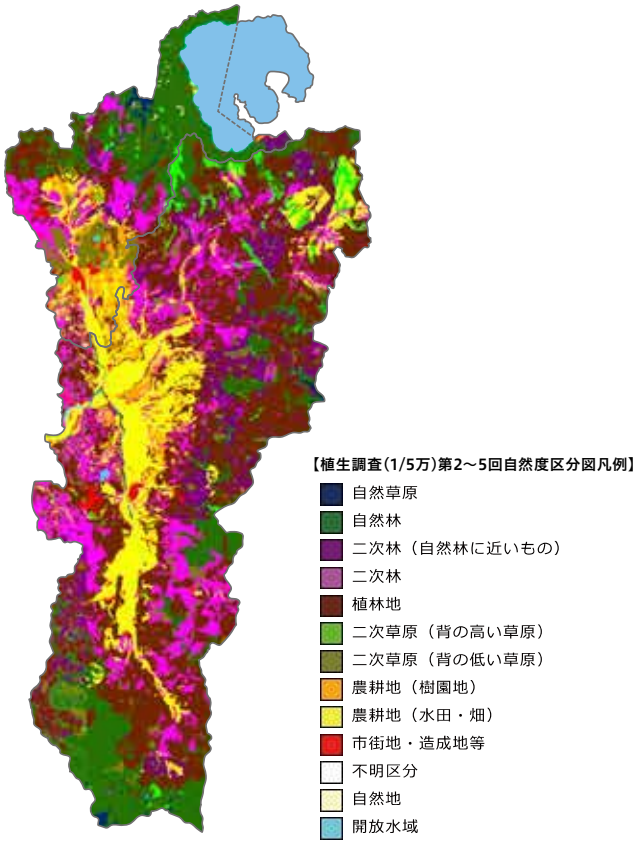
こうした森林や河川・湖沼・湧水地は、ヒメフラスコモ・カタシャジクモ(共に絶滅危惧Ⅰ類)などの水生植物やイワナ・アユ・トミヨ属淡水型(推測)などの魚類、クロサンショウウオ(準絶滅危惧)などの両生類、ミヤマクワガタ・アキアカネなどの昆虫類、シジュウカラ・アカゲラ・クマタカ(絶滅危惧ⅠB類)などの鳥類、ツキノワグマ・ニホンカモシカ(特別天然記念物)・ホンドテン・ヤマネ(国天然記念物)などの哺乳類を育む豊かな生態系といえる。

一方で、近年ツキノワグマが人間の生活圏へ出没している。さらに、生息域の拡大や個体数の増加に伴いニホンジカ・イノシシ・ニホンザルも出没し、農作物などへの被害が発生していることから対策が必要である。

●植生区分図



●植生自然度区分



資料:環境省生物多様性センター「植生調査(1/5万)第2～5回(1978～1999)」をもとに作成

2節　社会的環境

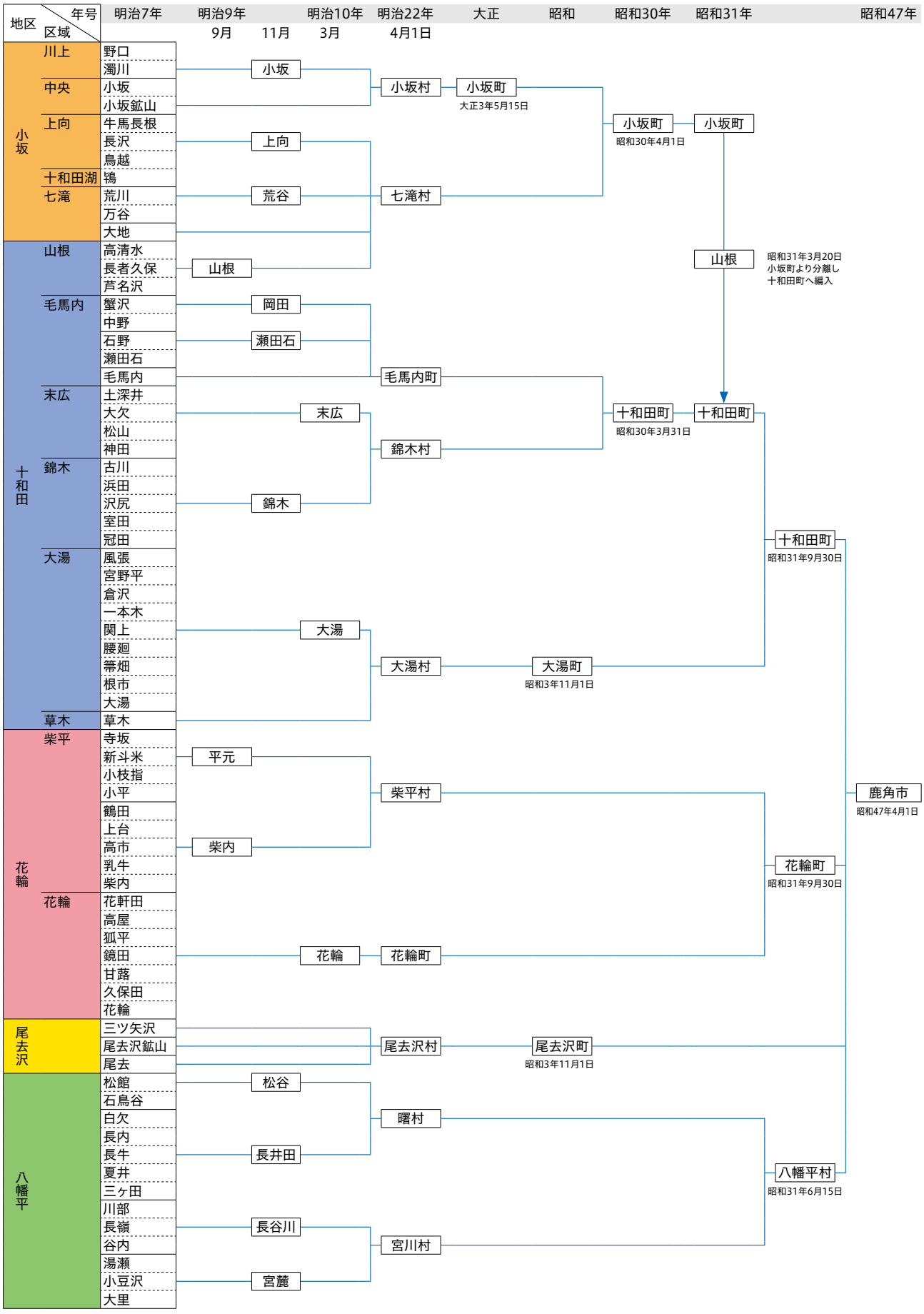
1．鹿角地域の成り立ち

鹿角地域は明治4(1871)年に秋田県に編入され、当初あった70村が明治9～10(1876～1877)年の合併により22村になり、明治22(1889)年に小坂村、七滝村、毛馬内町、錦木村、大湯村、柴平村、花輪町、尾去沢村、曙村、宮川村の10町村となった(注4)。その後、昭和30～31(1955～1956)年に小坂町、十和田町、花輪町、尾去沢町、八幡平村の5町村になり、昭和47(1972)年に十和田町、花輪町、尾去沢町、八幡平村の4町村が合併して鹿角市が誕生し、現在の小坂町と鹿角市の2市町となった。

なお、七滝村は昭和30(1955)年に小坂町と合併したが、七滝村に属していた山根集落は十和田町に経済圏を依存していたため、昭和31(1956)年3月に十和田町に編入した。

注釈4　小坂鉱山・尾去沢鉱山は町村とは別に独立した自治組織だった。

●市町村の推移

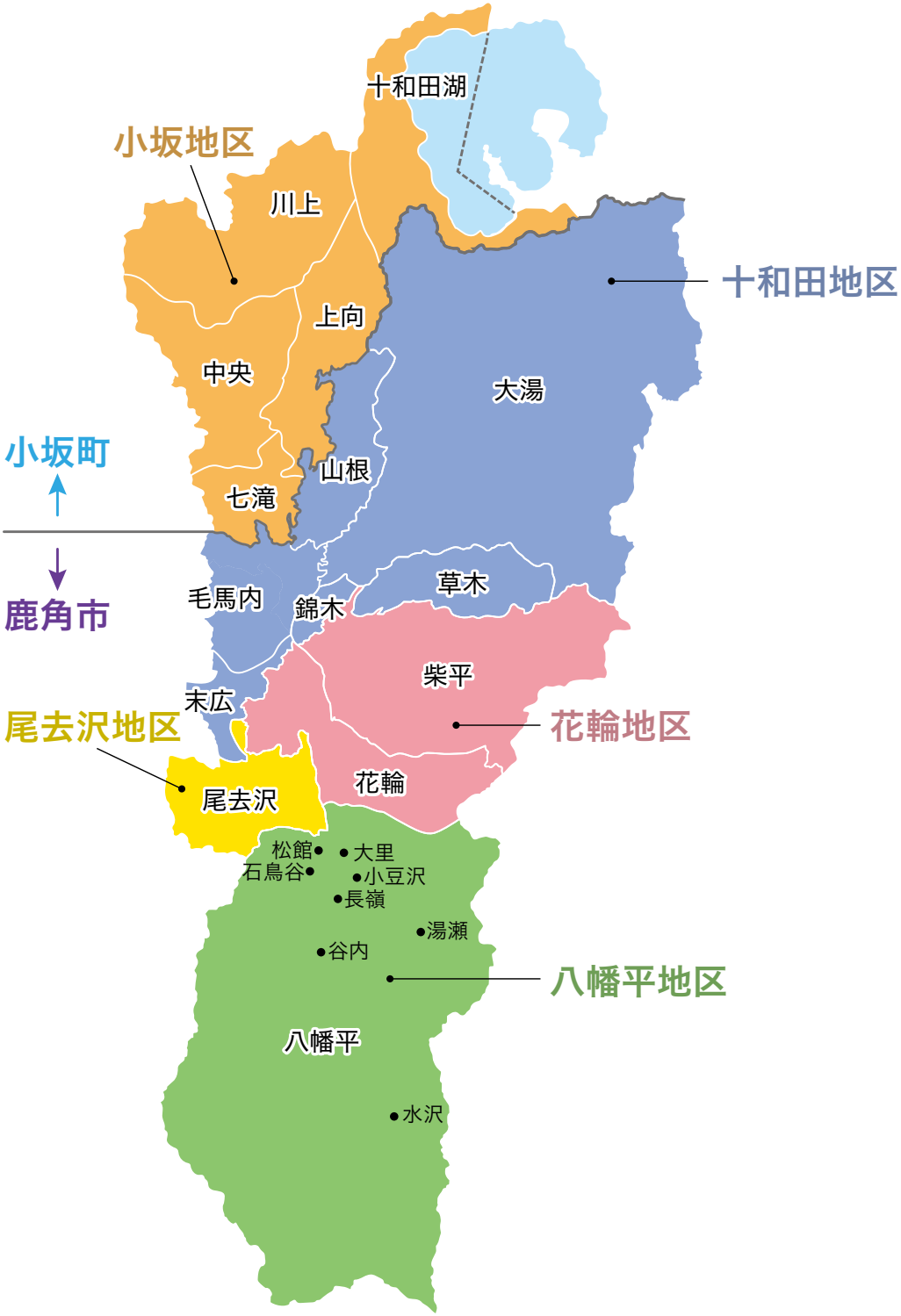


資料：鹿角市先人顕彰館『鹿角人物事典改訂・増補版』をもとに作成

2．地区区分

鹿角市は4町村が合併し昭和47(1972)年に市になったことから、現在も旧町村がそれぞれ特色ある地域としてその名残をとどめ、行政施策の対象区域としても用いられる。そのため、本地域計画では現小坂町と鹿角市の旧町村の領域に「地区」をつけ、小坂地区、十和田地区、花輪地区、尾去沢地区、八幡平地区と明示する。また地区の中の大字や連絡協議会などの範囲を「区域」として呼称する。

●地区の区分



(1)小坂地区

鹿角地域の最北部に位置し、北から十和田湖区域、川上区域、中央区域、上向区域、七滝区域がある。地域内を縦断する小坂川は、米代川水系の大湯川の支流である。明治30年代以降に観光地として発展した十和田湖や小坂鉱山の隆盛に伴って、小坂地区は発展した。現在は、特別名勝及び天然記念物に指定されている十和田湖および奥入瀬渓流や、重要文化財に指定されている康楽館、旧小坂鉱山事務所などの近代化遺産を活かした観光業に力を入れている。このほか鉱山の製錬技術を核としたエコタウンとしての取組みを進める。

(2)十和田地区

鹿角地域の北部に位置し、山根区域、大湯区域、草木区域、毛馬内区域、錦木区域、末広区域がある。米代川の支流として大湯川などの河川が流れる。特別史跡大湯環状列石(大湯区域)をはじめとした縄文時代から平安時代の遺跡が多く見つかっている。また口承文芸の田道伝説や錦木塚伝説(ともに錦木区域)、左多六とシロ(草木区域)、八郎太郎伝説(鹿角全域)や、大太鼓を中心とした無形の民俗文化財が残されている。江戸時代は白根金山、明治に入ると小真木鉱山(ともに末広区域)、不老倉鉱山(大湯区域)の隆盛とともに毛馬内区域は消費物資の供給地として発展した。大湯区域は江戸時代に盛岡藩主が訪れるなど温泉保養地として発展した。市日(注5)を開き農民の生産物や採集物などの物々交換などが行われた。また月山神社(毛馬内区域)は鹿角地域のうち毛馬内通の総鎮守であり現在も信仰を集める。

(3)花輪地区

鹿角地域の中央部、米代川右岸に位置し、花輪区域と柴平区域に分けられる。花輪区域は米代川の支流の福士川や米代川から取水する大堰が流れている。農村と商業地に分かれ、尾去沢鉱山の隆盛に伴い消費物資の供給地として発展し、酒造店や染物店、市日、花輪祭典などで賑わった。柴平区域は米代川の支流の間瀬川や不動川が流れ、奈良・平安時代の遺跡が多く見つかっており、鹿角開墾伝説が伝わる地域でもある。明治40年代以降はりんごの生産地として発展し、現在も果樹の生産が盛んである。

(4)尾去沢地区

鹿角地域の中央部、米代川左岸に位置し、鉱山町と農村に分けられる。尾去沢鉱山の発見以来、鉱山町として発展し花輪区域の経済を支えたが、昭和53(1978)年に尾去沢鉱山が閉山すると花輪区域のベッドタウンとなる。尾去沢鉱山に由来がある大森親山獅子大権現舞やからめ節金山踊りが現在も受け継がれる。

(5)八幡平地区

鹿角地域の南部に位置し、南端部は十和田八幡平国立公園に指定されている。八幡平地区は活火山の地熱を利用した地熱発電や米代川及びその支流の豊富な水量を利用した水力発電などの自然エネルギー事業が行われている。また、豊富な水資源は田畑を潤すほか、八幡平温泉郷・湯瀬温泉郷といった温泉を生み出している。大日堂伝説(だんぶり長者物語)に由来を持つ大日堂舞楽は伝承1,300年といい、大里集落や小豆沢集落を中心に古代の流通の形跡を残す。また大日霊貴神社(通称大日堂)は鹿角地域の総鎮守として鹿角地域全域から信仰を集める。

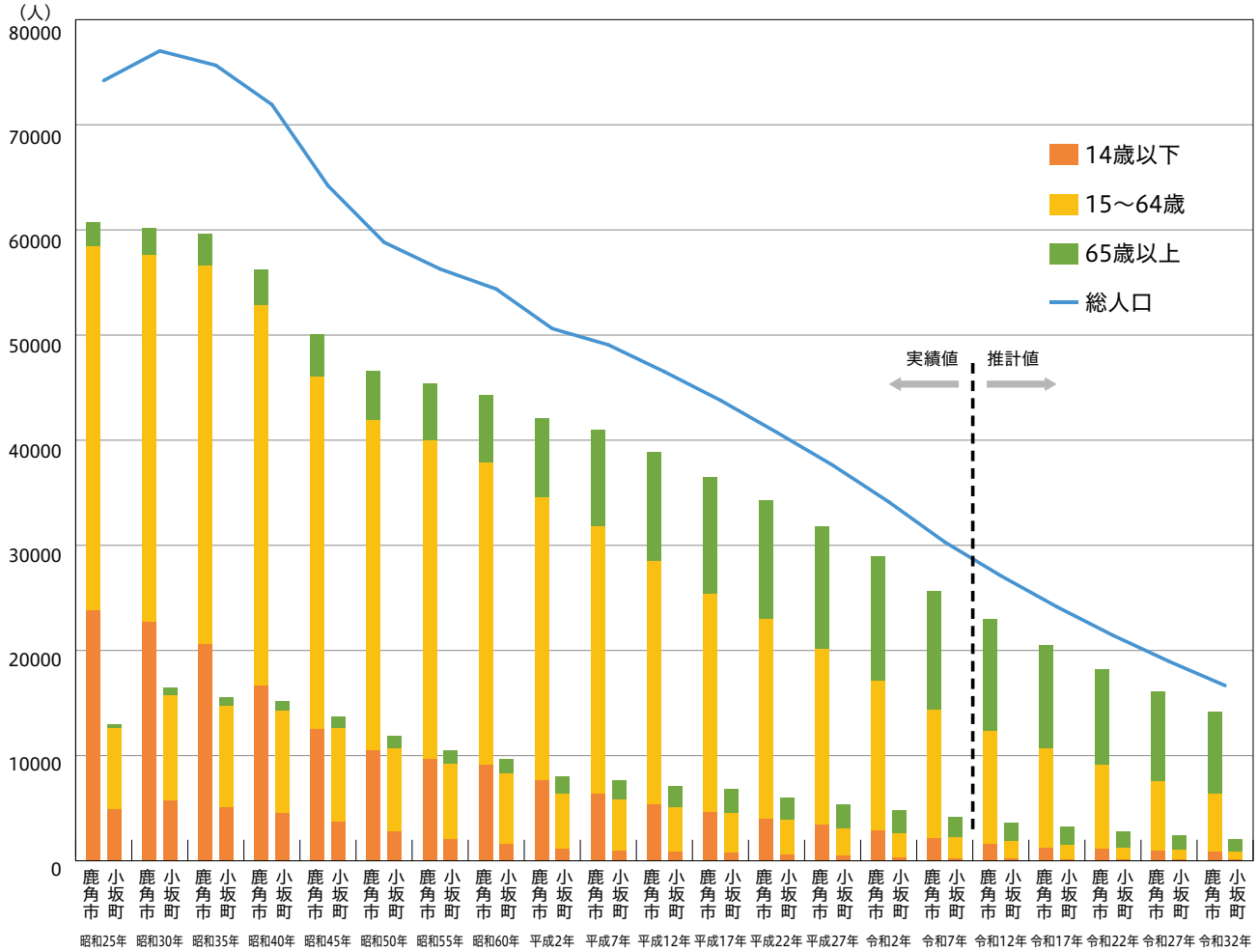
注釈5　鹿角地域では定期市や臨時市は市日と呼ばれる。本地域計画では市日という。

3．人口動態

令和7(2025)年8月現在の鹿角地域の人口は、30,901人(鹿角市26,556人、小坂町4,345人)である。昭和30(1955)年の77,010人をピークに減少を続けている。令和32(2050)年の将来推計人口は16,289人(鹿角市14,230人、小坂町2,059人)である。雇用機会不足や高等教育機関への進学者の増加などにより依然として鹿角地域外への人口流出が続く状況にある。総人口の減少が各年齢層で続く一方で、高齢化が進行し、令和22(2040)年の高齢化率は45%を上回る見込みである。

また、人口分布をみると、国道や県道沿いに人口が分布する傾向があり、特に花輪地区花輪区域の鹿角花輪駅周辺や十和田地区の毛馬内区域・錦木区域・大湯区域の一部、小坂地区中央区域に人口集中がみられる。十和田地区大湯区域の山間部や八幡平地区は集落が広範囲に分散している。

●人口の推移



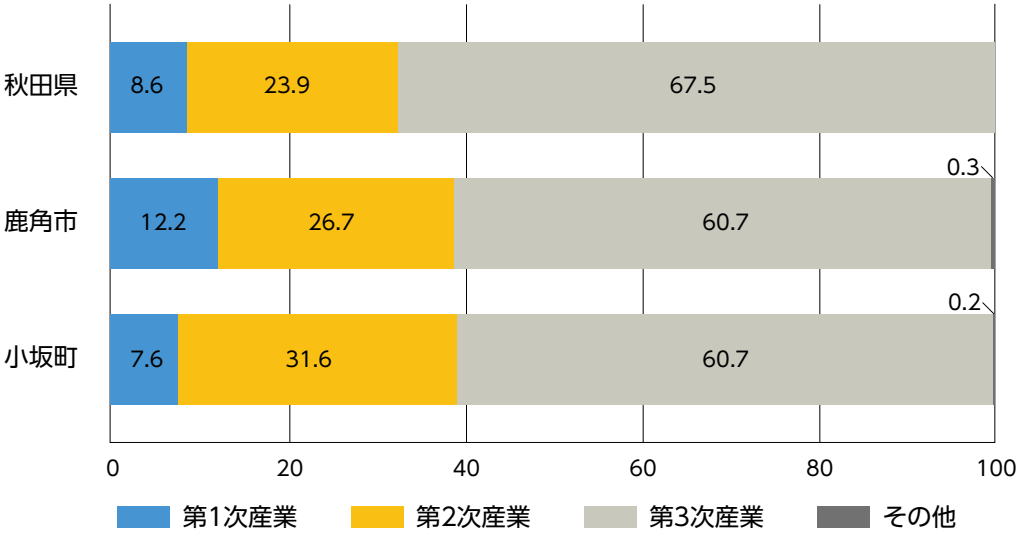
資料:「国勢調査」(昭和25年～令和2年)及び国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(令和5(2023)年推計)をもとに作成

4．産業

鹿角地域は古くから金属鉱床資源と森林資源に恵まれ、昭和50年代から60年代の閉山まで尾去沢鉱山(尾去沢地区)や小坂鉱山(小坂地区)などの隆盛が産業の発展に大きな影響を与えてきた。鉱山が使用する電力をまかなうための水力発電所は明治30年代から、採掘技術を活かした地熱発電所は昭和40年代に建設されるなど、早くから再生可能エネルギー開発が進んでいる。また、十和田八幡平国立公園は国内屈指の景勝地として全国から観光客を集め、3か所の温泉郷とともに近代に入り観光サービス業が発展した。

鉱山閉山後は、鉱山の製錬技術を活用し、環境リサイクル産業への転換が図られている。令和3年度の鹿角地域の総生産額は約1,323億円である。第一次産業及び第二次産業の占める割合が秋田県平均に比べて高く、就業者の割合も同様である。

●産業別就業者の割合



資料:「国勢調査」(令和2年)をもとに作成

(1)農業

鹿角地域は内陸中山間地の盆地で、冷涼かつ寒暖差が大きい。この気候から水稲や園芸作物、果樹、畜産などとの複合経営が進められてきた。近年は枝豆やトマト、きゅうりなどの畑作物、収穫時期が遅い「北限の桃」などの果樹、耕作放棄地を活用したそばの作付けが拡大している。また、日本ワインの原料である山ぶどう系品種を栽培し、平成29(2017)年から日本ワインの醸造も行われる。さらに昭和32(1957)年に日本短角牛として品種登録された「かづの牛」(GI登録)や昭和44(1969)年に生産を始めた「八幡平ポーク」、平成7(1995)年に生産を始めた「十和田湖高原ポーク桃豚」といった地域独自の畜産業が盛んであることが特色である。

(2)鉱業

鹿角地域は金属鉱床資源が豊富な地域で、尾去沢鉱山(尾去沢地区)、小坂鉱山(小坂地区)は全国的にも有数の大規模鉱山であった。下記表のように、かつては金属鉱床資源を活かして金銀銅などが採掘されたが、現在は全て廃業している。

●明治以降の主な鉱山と産出鉱物

名称	地区	規模	主な産出鉱物	名称	地区	規模	主な産出鉱物
小坂鉱山	小坂	大	金・銀・銅・鉛・亜鉛・硫化鉄	来満鉱山	十和田	小	金・銀・銅・鉛・亜鉛・硫化鉄
鴇鉱山	小坂	中	金・銀・銅・亜鉛	花輪鉱山	花輪	中	金・銀・銅・鉛・亜鉛
大地鉱山	小坂	小	金・銀・銅・硫化鉄	細地鉱山	花輪	中	金・銀・銅・鉛・亜鉛
金畑鉱山	小坂	小	金・銀・銅	四角鉱山	花輪	小	金・銀・銅・鉛・亜鉛
相内鉱山	小坂	中	金・銀・銅・亜鉛・硫化鉄	尾去沢鉱山	尾去沢	大	金・銀・銅・鉛・亜鉛・硫化鉄
鉛山鉱山	小坂	中	金・銀・銅・亜鉛・硫化鉄	田ノ沢鉱山	八幡平	小	金・銀・銅・鉛・亜鉛
古遠部鉱山	小坂	中	金・銀・銅・鉛・亜鉛・硫化鉄	真金山鉱山	八幡平	小	金・銀・銅
小真木鉱山	十和田	中	金・銀・銅	小割沢鉱山	八幡平	小	金・銀・銅・鉛・亜鉛
立石鉱山	十和田	小	金・銀・銅	宮川鉱山	八幡平	小	硫黄
土深井鉱山	十和田	小	金・銀・銅	又一鉱山	八幡平	小	硫黄
不老倉鉱山	十和田	大	金・銀・銅・鉛・亜鉛	両国鉱山	八幡平	小	硫黄

資料:鹿角市『鹿角市史』(第4巻)及び斎藤實則『鉱山と鉱山集落』をもとに作成

(3)製造業

鹿角地域は、農産物などの原料の特性を活かした加工製品を製造する企業の誘致に力を入れている。そのほか鉱山の製錬技術を生かした、多くのリサイクル関連企業が集約されている。

(4)商業

鹿角地域は、尾去沢鉱山(尾去沢地区)や小坂鉱山(小坂地区)といった鉱山の隆盛により「鉱山の町」として栄え、特に中央部の花輪地区花輪区域は、市日や酒造店、染物店などさまざまな業種の商店が並び賑わった。昭和50年代から60年代の鉱山閉山が大きく影響し、小売業やサービス業を中心に繁華街型商店街は縮小した。近年では中心市街地の衰退や空き店舗の増加などが課題として挙げられる。市日は、小坂地区、十和田地区、花輪地区で開かれ、農産物を求める住民や観光客に親しまれている。

5．交通

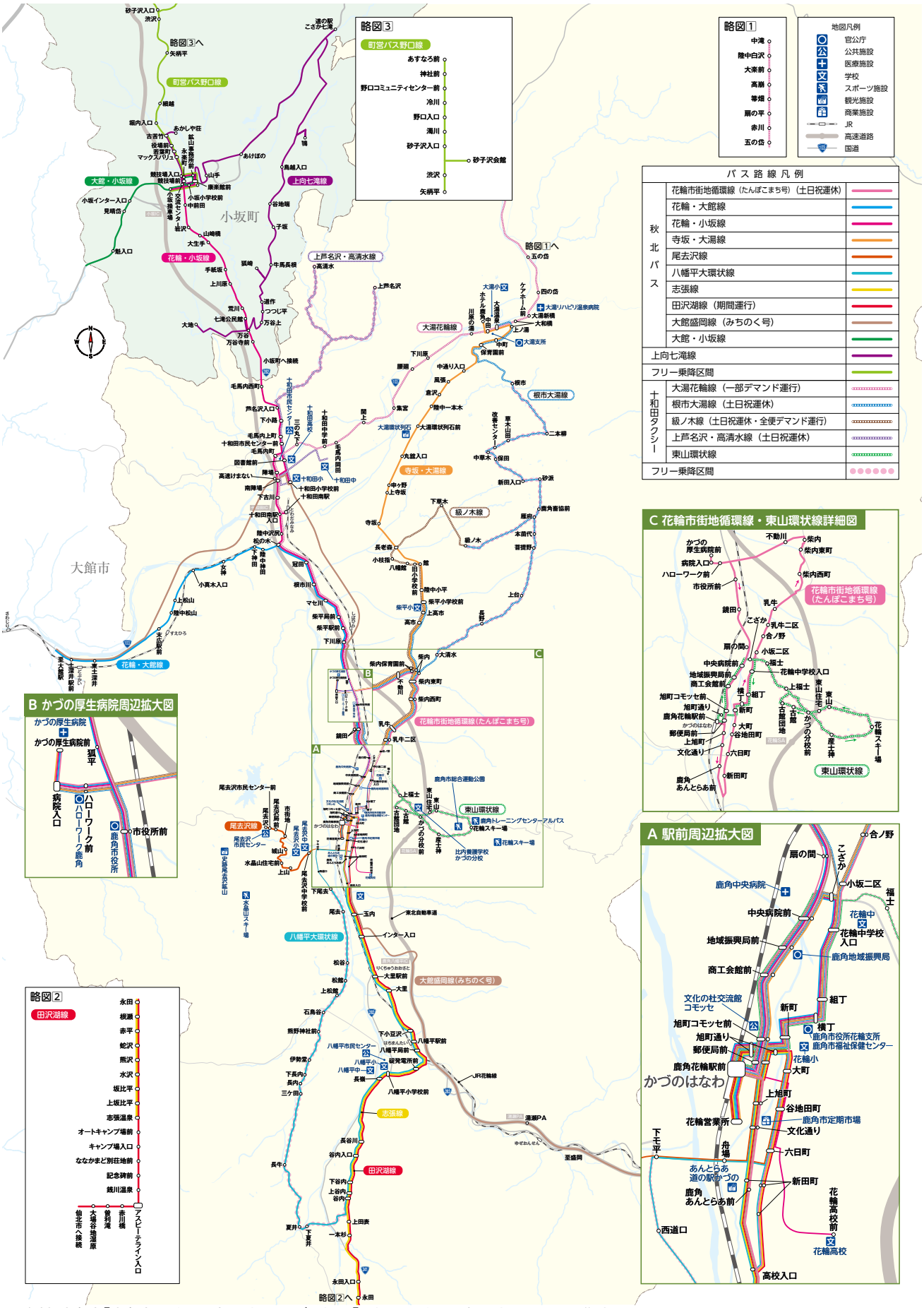
鹿角地域には、米代川に沿って南北に国道282号、ＪＲ花輪線、東北自動車道が整備され日常交通においても重要な役割を担っている。東北自動車道の「鹿角八幡平」、「十和田」、「小坂」のインターチェンジと秋田自動車道の「小坂ジャンクション」により、青森市、弘前市、八戸市、盛岡市、秋田市など主要都市と2時間圏内で結ばれ、高速バス路線も運行する。

公共交通は、令和7(2025)年4月現在、路線バスが19路線、乗合タクシーが6路線ある。多くは鹿角花輪駅を基点に運行しているが、今後人口減少などにより乗合タクシーやオンデマンド交通による交通手段が増えていくと推測される。また、自家用有償旅客運送などが八幡平−十和田湖間、観光客向けタクシーが康楽館−十和田湖間で運行している。

●公共交通網図

資料：鹿角市『鹿角市地域公共交通計画』をもとに作成

●バス路線図（令和7(2025)年4月現在）

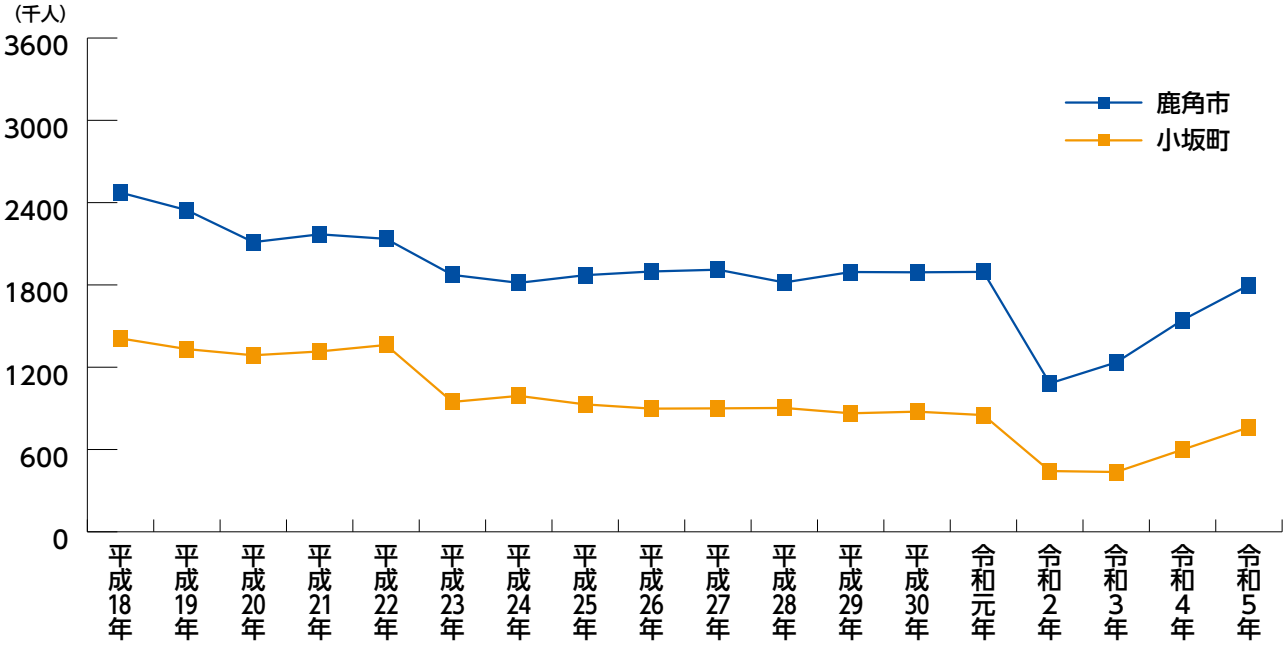


資料：鹿角市『鹿角市地域公共交通計画』及び小坂町『小坂町地域公共交通計画』をもとに作成

6．観光

鹿角地域は、十和田八幡平国立公園に代表される湖と火山現象による地形、ブナ林やオオシラビソ(アオモリトドマツ)林といった原始性の高い森林に加え、高山植物や湿原植物群落も見られる豊かな自然を有している。地域内には縄文時代の遺跡である大湯環状列石をはじめ、長く培われてきた大日堂舞楽や花輪祭(はなわまつり)の屋台行事、康楽館などの歴史文化、「きりたんぽ」や「けいらん」などの食文化、火山現象による温泉の効能を活かした湯治文化が育まれた。こうした自然、歴史文化、食、湯治などを魅力と捉え、観光コンテンツとして活用することで、滞在型・着地型観光のプランを造成し誘客に取組んでいる。豊富な観光資源により、観光入込客数は高度経済成長期までは増加したが、経済状況や旅行形態の変化、東日本大震災の影響により減少傾向に転じた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大で、さらなる減少を招いたが、自治体による旅行需要の喚起策などにより令和3(2021)年以降、観光客数は回復傾向にある。

●鹿角地域観光入込客数



資料:「鹿角市産業活力課観光動態調査」及び「小坂町観光商工課調査」をもとに作成

7．歴史・文化に関わる鹿角地域の施設

(1)博物館・資料館及びその他展示施設

鹿角地域の博物館・資料館など常設の展示施設は以下のとおりである。

●鹿角地域の博物館・資料館など

名称	地区	概要	所有者
小坂町立総合博物館郷土館	小坂	小坂町の成り立ち、鉱山を中心とした歴史、自然環境について研究・展示する。	町
十和田湖観光振興センター（道の駅十和田湖内）	小坂	特別名勝及び天然記念物である十和田湖を紹介する。カルデラ湖の成り立ちやヒメマスの増殖に成功した和井内貞行関連資料を展示する。	町
中小路の館（旧工藤家住宅主屋）	小坂	明治18(1885)年に建築された在郷武士の家系の住宅を公開する(県指定)。	町
明治百年通り（青空の博物館）	小坂	国指定、国登録などの歴史的建造物が現地保存または移設され、通り全体が展示施設となっている。観光案内人が活動している。	町
大湯こけし館（大湯温泉総合振興プラザ内）	十和田	大正10(1921)年以降に大湯区域で製作されたこけしを中心に、東北各地のこけしを展示する。	市
大湯ストーンサークル館	十和田	特別史跡大湯環状列石とそのガイダンス施設である。土器づくりなどの体験ができる。大湯環状列石をガイドする大湯SCの会が活動している。	市
鹿角市先人顕彰館	十和田	鹿角市にゆかりのある先人を顕彰し、資料を収集保存し、研究・展示する。	市
錦木塚展示室（錦木地区市民センター内）	十和田	錦木塚や錦木塚伝説に関する資料を展示する。	市
鹿角市歴史民俗資料館（旧鹿角郡公会堂）	花輪	大正5(1916)年に建築された旧鹿角郡公会堂(市指定)に鹿角市の民俗資料を中心に展示を行う。	市
旧関善酒店	花輪	明治38(1905)年に建築された酒屋兼住居で、建物や当時の道具を見学できる(国登録)。建物のガイドをするNPO関善賑わい屋敷が活動している。	民間
祭り展示館（道の駅かづの内）	花輪	花輪祭の屋台行事(国指定)で用いる屋台を収蔵展示する。	市
鹿角市鉱山歴史館	尾去沢	尾去沢鉱山の歴史などを伝える施設である。	市

鹿角市歴史民俗資料館
（旧鹿角郡公会堂）

旧関善酒店

(2)観光施設

鹿角地域の主な観光施設は以下のとおりである。

●鹿角地域の主な観光施設

名称	地区	ジャンル	概要	所有者
旧小坂鉱山事務所	小坂	歴史	明治38(1905)年に建築された近代鉱山における本格的鉱山事務所建築である(国指定)。ルネッサンス風の洋館で、螺旋階段やサラセン風のバルコニーなどが特徴である。館内を見学できる。	町
旧小坂鉱山病院記念棟	小坂	歴史	明治に発足した小坂鉱山病院の霊安施設である(国登録)。	町
旧小坂鉱山工作課原動室(赤煉瓦倶楽部)	小坂	食・歴史	明治37(1904)年に建築された木骨れんが造の建物である(国登録)。平成26(2014)年に移築・復原され、お土産売り場や軽食を提供するカフェとなっている。	町
康楽館	小坂	歴史	明治43(1910)年に建築された芝居小屋である(国指定)。外観正面や内部天井は洋風、館内は江戸時代の典型的な芝居小屋で和洋折衷の造りである。芝居の上演や建物の構造・舞台装置を公開している。	町
小坂鉄道レールパーク	小坂	歴史	旧小坂鉄道小坂駅本屋及びプラットホーム(国登録)と旧小坂鉄道小坂駅機関車庫(国登録)の施設を利用したテーマパークである。駅舎や車両の展示、乗り物体験ができる。	町
天使館(旧聖園マリア園)	小坂	歴史	小坂鉱山従業員のための幼児教育施設の新園舎として建築された西洋風の建物である。館内見学のほか、発表会などの会場として使われる(国登録)。	町
十和田ふるさとセンター	小坂	食・自然	十和田湖でのアクティビティ体験やバーベキューができる。施設内の食堂では地元食材を使った料理を提供する。	町
十和田ホテル	小坂	歴史	十和田湖西湖畔の高台にあるホテルである(国登録)。秋田杉を使った昭和初期の本格的近代和風建築である。	県
道の駅十和田湖	小坂	食・自然	十和田湖にある道の駅である。十和田湖の紹介や和井内貞行関連資料などを展示する。	町
道の駅こさか七滝	小坂	食・自然	小坂地区中央区域と十和田湖を結ぶ樹海ラインにある道の駅である。日本の滝百選の七滝がある。	町
発荷峠展望台・紫明亭展望台・笹森展望所・滝ノ沢展望台	小坂	自然	十和田八幡平国立公園の十和田八甲田エリアにある。陥没したカルデラ湖の十和田湖西岸に位置し、その外輪山や八甲田連峰を望むことができる。	町
甲岳台展望所	十和田	自然		市

名称	地区	ジャンル	概要	所有者
大湯温泉郷	十和田	温泉	約800年前に開湯したといわれる名湯である。大湯川沿いに自然湧出した温泉で、効能と湯量から江戸時代には盛岡藩の保養温泉地に指定されていた。ホテル・旅館のほか、現在も住民が利用する共同浴場が4か所ある。	市
中滝ふるさと学舎	十和田	食	平成20(2008)年に閉校した旧中滝小学校舎を改修した交流体験施設である。建築当時(昭和30(1955)年)の木造校舎を活用し、クラフトや郷土料理、ピザ作り体験のほか、カフェやケビン棟を併設する。	市
道の駅大湯 (湯の駅おおゆ)	十和田	食	大湯温泉郷にある道の駅である。癒しと健康をテーマにブランド牛「かづの牛」がメインのカフェやお土産などを豊富に取り揃える。	市
道の駅かづの	花輪	食	国道282号沿いにある道の駅で十和田八幡平国立公園の中間に位置する。みそ付けたんぽづくり体験のほか、お土産などを豊富に取り揃える。地域連携DMOによる観光情報発信拠点となっている。	市
史跡尾去沢鉱山	尾去沢	歴史	尾去沢鉱山跡を利用したテーマパークである。観光坑道内では約900万年前の地殻が露出し、国内最大級を誇る銅鉱脈群採掘跡を間近で体感できる。純金砂金採りなどが体験できる。	民間
八幡平温泉郷	八幡平	温泉	十和田八幡平国立公園の八幡平地域にある国内有数規模の湯量を誇る温泉郷である。古くから湯治場として賑わう豊かな自然に囲まれた温泉郷。標高が高く、野趣あふれる秘湯と呼ばれる。	市
澄川地熱発電所	八幡平	自然・ 温泉	十和田八幡平国立公園の八幡平地域にあり、東北地方で一番高い標高の発電所である。PR館では地熱発電について学習できる。	民間
八幡平ビジターセンター	八幡平	自然	十和田八幡平国立公園の八幡平地域にあり、八幡平の成り立ちや環境、生態系などについてジオラマなどで紹介する。	国
八幡平ふれあいやすらぎ 温泉センターゆらら	八幡平	温泉	十和田八幡平国立公園の八幡平地域にあり、日帰り入浴ができる。寝湯、打たせ湯など多様な温泉が楽しめる。「八幡平ポーク」を使った料理を提供する食堂が併設する。	市
湯瀬温泉郷	八幡平	温泉	景勝地湯瀬渓谷にある温泉郷であり、「川の瀬からお湯が湧く」ほど湯量が豊富なことから湯瀬の名がついたと伝わり美人の湯といわれる。	市

（3）その他公共施設

（1）、（2）以外の歴史、文化に関わる活動を行う公共施設は以下のとおりである。

●その他公共施設

名称	地区	概要
川上公民館	小坂	小坂地区川上区域の団体が使用する。大太鼓の練習や盆踊り大会、郷土食の講習会を行う。
小坂町交流センターセパーム	小坂	生涯学習のつどいまなびピアでは個人・団体の作品や活動発表が行われる。また郷土を知るための講座が行われる。
小坂町立小坂図書館	小坂	小坂町や小坂鉱山の歴史、郷土の偉人に関する図書などを所蔵している。
七滝公民館	小坂	小坂地区七滝区域の団体が使用する。郷土食の講習会や七滝区域の郷土を知るための講座が行われる。
大湯地区市民センター	十和田	十和田地区大湯区域の団体が使用する。
出土文化財管理センター	十和田	鹿角市内で発掘された土器など多くの出土資料を収蔵している。
十和田市民センター	十和田	十和田地区の芸能祭や毛馬内の盆踊の着付け教室、十和田地区の郷土を知るための講座が行われる。
十和田図書館	十和田	「立山文庫」、「諏訪文庫」、「みどりの文庫」など郷土の先人に関するコレクションを収蔵する。TowadaGallery では個人・団体の作品や図書館資料の紹介を行う。
錦木地区市民センター	十和田	十和田地区錦木区域の団体が使用する。
鹿角市交流センター	花輪	団体が講演などを行う。
鹿角市交流プラザ（MITプラザ）	花輪	情報技術の普及と音楽を通じた交流の場。百人ホールでは各種イベントやミニコンサートなどが行われる。
鹿角市福祉プラザ	花輪	子どもから高齢者まで多様なニーズに合わせたサービスや事業を展開している総合福祉施設である。
鹿角市文化の杜交流館コモッセ	花輪	文化ホールでは鹿角市民俗芸能フェスティバルのほか、個人・団体が公演を行う。
柴平地域活動センター	花輪	花輪地区柴平区域の団体が使用する。
花輪市民センター（文化の杜交流館コモッセ内）	花輪	花輪の町踊り講習会や花輪地区子ども会対抗かるた大会のほか花輪地区の郷土を知るための講座が行われる。展示ギャラリーでは個人・団体の作品や鹿角市が所蔵する資料の紹介を行う。
花輪図書館（文化の杜交流館コモッセ内）	花輪	旧花輪町に関する資料を収蔵する。郷土に関する講座などが行われる。
尾去沢市民センター	尾去沢	尾去沢地区の芸能祭や郷土を知るための講座が行われる。
谷内地区市民センター	八幡平	八幡平地区谷内の年中行事などが行われる。
八幡平市民センター	八幡平	八幡平地区の芸能祭が行われる。

鹿角市民俗芸能フェスティバル

古文書整理

競技かるた

盆踊(大太鼓の演奏)

茜染の体験

花輪ばやし三味線・笛講習会
花輪ばやし祭典委員会提供

●鹿角地域の施設

資料:『伝説の郷鹿角市　文化・歴史編　観光ガイドブック』をもとに作成

八幡平温泉郷(蒸の湯温泉)

小坂鉄道レールパーク

3節 歴史的背景

1．先史

日本列島での後期旧石器時代は今から約3万8000年前から1万5000年前頃で、最後の氷期にあたる。人々は大型動物の狩猟を行いながら移動生活を営んでいた。秋田県内ではナイフ形石器などが発見されているが、鹿角地域は火山起源の土層が厚く堆積するため、旧石器時代の痕跡は確認されていない。

縄文時代は今から1万5000年前から2400年前まで1万年以上続き、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に区分される。この時代は土器や弓矢が登場し、狩猟採集を中心とした定住生活が営まれた。鹿角地域で確認されている遺跡の6割が縄文時代の遺跡であるが、時期によって遺跡の数や遺物量などが大きく変動する。また、遺跡の分布は、奥羽山脈の裾野に開けた扇状地、大小の河川によって形成された舌状台地、米代川沿いの段丘面などに集中し、標高は120mから190mの範囲である。

縄文時代草創期・早期(約15,000～7,000年前)は寒暖を繰り返しながら次第に温かくなった時期である。現在のところ、鹿角地域で発見された最も古い土器は飛鳥平遺跡(八幡平地区)の約1万年前の草創期の爪形文土器(注6)である。この時期の鹿角地域では、居住の痕跡は確認できていない。早期の遺跡も少ないが、花輪地区や十和田地区で発見されている。物見坂Ⅲ遺跡(十和田地区)で、早期半ばの貝殻で文様をつけた貝殻文土器を伴う住居の痕跡が発見されている。

縄文時代前期(7,000～5,000年前)は温暖化が進み、現在のような落葉広葉樹林が形成され、食糧が豊富になった時期である。この時期の痕跡は、小坂川や荒川の流域、米代川右岸の花輪地区や八幡平地区にかけて多く発見されている。八幡平地区では急峻な山地を背にしたような立地が選ばれた。清水向遺跡(八幡平地区)では2棟の住居の痕跡とともに、東北地方北部に分布する細長い形で縄目文様を施した円筒土器と東北地方南部の沈線で渦巻き状の文様を施した大木式土器が発見された。鹿角地域が東北地方北部だけでなく南部との交流があったこともわかる。また、はりま館遺跡(小坂地区)でも住居の痕跡が発見された。

縄文時代中期(5,000～4,000年前)は、温暖な気候が続き安定した生活が営まれた。遺跡の数も増加し規模も大きくなった。遺跡の分布は縄文時代前期に引き続いて花輪地区柴平区域から八幡平地区にかけて台地上に密集する。特に天戸森遺跡(花輪地区)では、縄文時代中期半ばから後半にかけて竪穴住居跡140棟、土坑103基、配石遺構21基などが多量の土器・石器とともに発見された。住居は数軒単位でまとまり、何度も建替え、長期にわたって居住しており、拠点的な集落と推定される。また、配石遺構は石を円形に並べたものや弧状配列をとるものなどがあり、縄文時代後期の大規模環状列石との関わりも指摘できる。一方、小坂地区では遺跡分布の範囲は広がるが遺跡数は減少し、小集団が食糧を求めて短期間の居住と移動を繰り返すキャンプサイトが多くなったと推定される。

天戸森遺跡
(花輪地区)

大湯環状列石出土品
(県指定、十和田地区)

縄文時代後期(4,000～3,000年前)は縄文時代中期末に始まった世界規模の気候寒冷化による影響を受け、大規模な集落が解体し、小規模化・分散化する傾向が強まった。また、社会構造や祭祀活動なども大きく変化した。北海道から東北地方北部の各地に大規模な環状列石が造営されるのがこの時期である。鹿角地域でも遺跡が全域に分布するようになり、後期前半に大湯環状列石(十和田地区)が登場し後期半ばまで続いた。この遺跡は野中堂・万座の二つの環状列石を主体とし、いくつかの集団による共同墓地であると同時にマツリや儀式などを行う場でもあった。遺跡からは土偶やさまざまな土製品・石製品が発見された。そのなかには男鹿半島や青森県深浦産の黒曜石などがあり、他の地域との交流がうかがえる。鹿角地域では大湯環状列石のほかに、米代川左岸の高屋館遺跡(花輪地区)などでも環状列石が発見されている。

縄文時代晩期(3,000～2,400年前)も比較的冷涼な気候が続いた。鹿角地域では後期後半以降、遺跡が減少していく。そのなかで玉内遺跡(八幡平地区)は配石遺構をはじめ、配石墓や土坑墓・土器棺墓が発見されるなど墓域を中心とした場であったと考えられる。東北地方の晩期の土器は、亀ヶ岡式土器と呼ばれ、精巧な文様で飾られた鉢や壺などがある。その文化を亀ヶ岡文化と呼び、多様な土製品・石製品や骨角、漆を用いた道具類が作

注釈6　爪または種々の工具を用いて刺突や押圧などを施した土器。

られ、なかでも遮光器土偶は亀ヶ岡文化を代表し、鹿角地域でも発見されている。

弥生時代は、大陸から稲作が伝わり、農耕生活が始まり、やがて小国家が成立するなど、社会が大きく変化した時代である。東北地方には、日本海沿いに弥生時代前期の土器が伝わり、津軽平野(青森県西部)でも水田による稲作が始まった。鹿角地域の弥生時代前期はわずかに土器が発見されているのみで、様相は明らかではない。

弥生時代後期になると、寒冷化などのため東北地方北部の稲作は廃れ、北海道の続縄文文化との関わりが強まった。鹿角地域では、わずかに台地上に活動の痕跡が発見されており、狩猟採集を軸に栽培、交易などを組み合わせた遊動的な生活がうかがえる。

古墳時代になると、東北地方北部では、北海道の続縄文文化と関連する遺跡や土器類が散在する。鹿角地域では、古墳文化の様相を把握できる痕跡は発見されていない。

2．古代

飛鳥・奈良時代になると、畿内で律令国家が成立した。天平5(773)年に、現在の山形県庄内地方から、秋田村高清水岡(秋田市)に出羽柵と呼ばれる地方支配の拠点が移された。それにより、律令国家の影響が秋田まで及んだ。出羽柵は、後に秋田城と改められた。鹿角地域では、鹿角沢Ⅱ遺跡(花輪地区)からカマドをもつ住居の痕跡と土師器高坏が発見され、飛鳥時代の生活の痕跡と推定される。また、穀物調理や繊維加工の痕跡も発見された。

奈良時代後半から平安時代になると、律令国家の支配領域では古墳が築造されなくなる一方で、北海道や東北地方北部では、末期古墳と呼ばれる独自の古墳が築造される。末期古墳は直径10m程の円墳の周囲に幅1m程の溝をもつ。埋葬品は鉄刀などの武具、馬具、勾玉などの玉類といった被葬者の威信を示すものが多く、地域の首長層の墳墓とされる。鹿角地域では、米代川右岸の枯草坂Ⅰ遺跡(十和田地区)など舌状に張り出した台地上に径5～7mの円墳と周囲に溝をもつ末期古墳が現れる。そこから蕨手刀や勾玉などが発見された。律令国家の支配下にあった地域との交流によってもたらされたものと推定される。また、集落の痕跡も舌状台地上に発見されていることから、その下に広がる沖積地で農耕を行っていたことが推定される。

「鹿角」の地名が文献に初めて登場するのは『日本三代実録』元慶2(878)年7月10日の条で、米代川流域の村として火内(大館市大館盆地)・楢渕(北秋田市鷹巣盆地)と並んで「上津野」と記される。この文献には同年3月に秋田城司の悪政に反発した秋田城以北の米代川流域を中心にした住人が蜂起した「元慶の乱」が記される。「上津野」は米代川上流の平野という意味で、米代川流域が出羽国の秋田城に管轄されていた。ヤマト王権から秋田城平定の命を受けた鎮守府将軍小野春風が、陸奥国から奥羽山脈を越えて上津野に入り、反乱に加勢した村々を説得しつつ米代川を下り秋田城へと南下したといわれる。春風がたどったこの山越えの道筋は「流霰道」と呼ばれ、中世の鹿角街道に受け継がれていく。この時代は米代川流域では遺跡が増加し、鹿角地域でも250もの遺跡が確認される。十和田地区から花輪地区にかけて米代川右岸の台地上にいくつも集落が形成され、その下に広がる河川沿いの平地で農耕を行ったと推定される。平安時代中期には十和田火山の噴火という大災害に見舞われた。

『扶桑略記』延喜15(915)年7月13日の条には出羽国での火山灰降下と農作物の被害が記録される。この火山灰は大湯環状列石のある中通台地などでは厚さ20～30cmの軽石層として確認できるが、この時発生したシラス洪水(毛馬内火山泥流)は、米代川流域の低地を覆いながら流れ下り、各地に埋没家屋の遺構が残った。十和田火山噴火は米代川流域にとどまらず、現在の青森県の津軽平野や上北地域、馬淵川流域など東北地方北部一帯に甚大な被害を与えた。

物見坂Ⅱ遺跡の十和田火山灰堆積状況(十和田地区)

3．中世

応徳3(1086)年、白河天皇は譲位後、上皇となって政務を行う院政を始めた。東北地方では在地豪族が力を蓄え中央貴族層や武士団と関わりながら抗争を繰り返した。後三年合戦後の寛治元(1087)年、藤原清衡は源義家の支援を受けて戦乱に終止符をうち、平泉に本拠地を移した。鹿角地域と直接的に関わりを示す文献は無いものの、戦いに敗れた清原家衡の残党や源義家の説話が遺される。

清衡は、南端の白河関から津軽外浜まで陸奥国を縦断する奥大道を整備したという。当時の奥大道は鹿角地域では、米代川最上流部の田山(岩手県八幡平市)から湯瀬、小豆沢、桃枝を通ると推定され、さらに比内を経て津軽へと続く交通の大動脈であった。奥大道上にあった天台寺(現岩手県二戸市浄法寺)は、東北地方の大日如来信仰の中心地として平泉藤原氏の庇護下におかれ、信仰の発信地だった。

また、鹿角地域は源平の争乱と直接的な関わりは無いものの、源平の争乱に由来を持つ仏像やその説話が遺される。

鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』には、藤原基衡による荘園年貢や仏師運慶への贈答品の記録がある。そのなかに馬・金などと並んで麻糸を織り上げた細布が記される。細布は鹿角地域ゆかりの産物とされ、平安時代中期の能因法師の歌にも詠まれ、「希婦細布」として「錦木塚」とともに歌枕として知られた。また、平泉藤原氏は東北地方で金鉱山を見出し、中尊寺金色堂に代表される黄金文化を築き上げた。その産金の地の一つとされるのが鹿角地域であり、金にまつわる伝説・民話が複数遺る。堪忍沢遺跡や太田谷地館跡などでは、製鉄・鍛冶に関する痕跡が数多く発見され、この頃には製錬技術が根付いていたと推定される。さらに、平泉藤原氏の財力の一端として漆があり、鹿角地域も産地であった。

堪忍沢遺跡(花輪地区)
秋田県教育委員会提供

文治5(1189)年の奥州合戦で平泉藤原氏が滅ぶと、源頼朝は関東武士を地頭として東北地方に配置した。やがて北条氏が幕府の実権を掌握し、全国に北条得宗家領として所領を拡大していった。

鹿角地域は、地頭として武蔵国を本領とする成田氏が配されたと推定され、鎌倉時代後期に北条得宗領に組み込まれていった。この所領には管理のため北条氏被官が地頭代などとして派遣され、やがて現地に土着した。

元弘3(1333)年の鎌倉幕府滅亡後、建武の新政で後醍醐天皇が天皇中心の政治を行い、公家を重視したため武士の不満が高まった。後醍醐天皇に対抗した足利尊氏が光明天皇を立て幕府を開いたことで、朝廷が南朝・北朝に二分し南北朝時代となった。室町時代中期に将軍の跡継ぎをめぐって起こった応仁の乱が全国に広がり、各地でそれまでの支配の仕組みを変える新たな動きとなった。十和田地区出身の東洋史家内藤湖南はこの乱を、日本史を二分する画期となる戦乱と定義し、日本史家に影響を与えた。

鹿角地域は混迷の時期となり、北条得宗領は没収地となり、足利尊氏は外ヶ浜や糠部郡など東北地方北部の交通や産馬の要衝を確保した。一方、建武政権の陸奥守北畠顕家は多賀国府から東北地方を統制し、北朝と南朝の対立が強まった。

延元元(1336)年以降、鹿角地域を治めた成田頼時、糠部郡に拠点を置く南部氏と、北朝の比内浅利氏・津軽曾我氏との間に度々衝突が起こった。この争乱で、「鹿角四氏」と称する安保・秋元・奈良・成田の在地武士団(国人)が勢力を拡大し、それぞれに拠点を構えながら鹿角盆地を治め、やがて周辺勢力の影響が及ぶようになった。一方で、南部氏が糠部郡から津軽・鹿角・比内・仙北と勢力を拡大すると、秋田郡を中心に勢力を伸ばし檜山(現在の能代市)を拠点とした檜山安東氏との対立が激化した。鹿角地域は出羽・陸奥の間に位置し、津軽につながる要衝でもあったため、双方の勢力による争奪の地となった。このような混乱が在地勢力の拠点たる城館設置を促したと考えられ、『鹿角由来記』には「鹿角四十二館」と記された。

檜山安東氏は比内を傘下に治めた後、鹿角地域へと進攻したが、南部氏は永禄12(1569)年に鹿角地域から安東氏の勢力を駆逐し、以後、鹿角地域における支配を確立した。この頃毛馬内で戦の労をねぎらうため歌舞を催したのが、「毛馬内の盆踊」に伝承されている甚句踊りの起源とする説がある。また大湯大太鼓も同時期の永禄の合戦の凱旋の際に叩いた太鼓の拍子だと伝わっている。

文化面では、室町時代に世阿弥が謡曲『錦木』を作るなど、都に鹿角の名が広まった。

4．近世

織田信長が室町幕府15代将軍足利義昭を追放し、室町幕府が滅亡した。信長が本能寺で自害した後、豊臣秀吉が信長の後継者争いに勝利した。秀吉は全国に停戦を命じ、東北の大名もそれに従い、天正18(1590)年天下統一が完成した。

このとき東北地方は秀吉による奥州仕置が行われ、奥羽に諸大名が再配置された。南部氏の所領は7郡(糠部・鹿角・岩手・志和・久慈・閉伊・遠野)となりそのなかに鹿角地域が含まれた。同時に領内の城館が整理された。鹿角地域の城館は花輪(花輪地区)・当麻(毛馬内ともいう)(十和田地区)・大湯(十和田地区)・長牛(八幡平地区)が境の要所として残されそれ以外は破却された。秀吉の奥州仕置に不満を持つ南部氏有力一族の九戸政実による反乱が天正19(1591)年3月に起こった。鹿角地域ではこの乱の前哨戦が起こり、鹿角四氏を中心に国人衆の大湯四郎左衛門・円子金十郎・大里修理らが九戸側につき大湯鹿倉館に籠城し、大光寺左衛門を大将とした南部側が館を包囲した。この戦いに敗れた大湯四郎左衛門らは九戸城へ落ち延びたが、翌年の蒲生氏郷・浅野長政ら奥州再仕置軍が九戸城を包囲し、九戸政実は降伏した。この後、鹿角地域では花輪・毛馬内・長牛を残し城館は破却された。

奥州南部領図十郡
(市指定、鹿角地域)

秀吉の死後、徳川家康が慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いに勝利し、慶長8(1603)年に江戸に幕府を開き、幕府と藩が全国の土地と民衆を支配する仕組みとして幕藩体制がしかれた。盛岡藩領となった鹿角地域は、豊富な金属鉱床資源や森林資源により、藩財政上、重要な位置にあった。これらの資源は秋田藩と隣接する地域に分布していたため、藩境をめぐり秋田藩と度々対立し、延宝5(1677)年6月に幕府による裁定が行われた。翌7月に秋田藩(現大館市)、盛岡藩境に境塚が築かれ、元禄6(1693)年に米代川の境として中州に十本の御境柱が建てられた。藩境警備の重要性から、花輪に中野氏、毛馬内に桜庭氏、大湯に北氏など重臣が配置された。承応年間(1652～1655)に花輪通、毛馬内通にそれぞれ代官所が設置され、藩境に番所が設けられた。毛馬内では慶長12(1607)年に当麻館から柏崎館に館を移し、直下に在町を整備し、現在の本町通りは毛馬内通の経済の中心地として発展した。ムラのなかにマチの機能をもったいわゆる在町は花輪・毛馬内・大湯に発達し、町並みが整えられ商品交換の場としての市日も開設された。これらの在町のうち花輪と毛馬内は御町ともいわれた。その範囲は、花輪は横丁・新町・大町・谷地田町・六日町と鹿角街道に沿う町並みまで、毛馬内は本町通りの上町・中町・下町の範囲だった。マチの家並は屋根の大棟が町通りに対し平行な平入の町家が多く、道路と平行な棟と軒先が連続した。

慶長3(1598)年の発見と伝わる白根金山のほか尾去沢諸金山などの鉱山開発が行われたが、寛文年間(1661～1673年)に入り金の産出が減少すると銅山へと転換した。そのなかでも尾去沢銅山は採掘量が多く、長崎貿易の支払いに用いられた。鉱物の運搬のため奥筋往来(来満街道)の街道が整備され、牛馬により野辺地まで運ばれた。その後船運で大坂へ運ばれた。鉱山への物資の供給地として賑わいを見せた花輪と毛馬内では、毛馬内祭り(月山神社祭礼)と花輪祭り(幸稲荷神社例祭)が隔年交代で行われたと伝わる。

森林資源は古遠部、新遠部から大量の木材が搬出され、盛岡から北上川を下り江戸へと運ばれた。また、地域内の広大な山間部を利用して馬産が行われた。馬は土起こしや耕作、荷物の運搬などに重用され生活に欠かせない存在だった。そのため鹿角地域は、駒形神社などが多く馬の神の信仰が盛んな土地である。なかでも十和田地区山根区域の芦名沢に所在する葦名神社は、この地方随一の馬の守護として現在の岩手・青森県からも信仰を集め、春の例祭では普段静かな山村の芦名沢にも市が立ち賑わった。

鹿角地域の特産物は、盛岡藩が作成した『御領分産物書上帳』(文政4(1821)年)に、鎌、紫根染木綿、茜染木綿、狭布(細布)、酒などとある。菅江真澄の『錦木』に「毛馬内・花輪の産物として、茜、紫の根染の色彩の美しいものがあり、鎌を篠竹の炭で鍛える鍛冶屋がある。(中略)酒屋があり、酒はさぞ良いことであろう」と記している(注7)。産業は酒造などの醸造業や紫根染・茜染などが発展した。また狭布(細布)は「錦木塚物語」にまつわり平安時代から歌枕として広く知られ、高山彦九郎が記した『北行日記』に天皇への献上を斡旋したと記され、世上の評価も高かったことが伺える。

注釈7　『錦木』伊藤裕現代語訳より

また、鹿角地域は温泉に恵まれ、江戸時代には大湯、湯瀬、八幡平で9か所の温泉があり慰安や娯楽もかねて多くの人々に親しまれた。大湯温泉は盛岡藩内の地誌を記す『邦内郷村誌』に近隣から湯治をする人々が絶えることなく集まるとあり、盛岡藩内の著名な湯治場として藩主がしばしば訪れた「いで湯の里」として親しまれた。

5．近代・現代

慶応4(1868)年に鳥羽・伏見で起こった新政府(注8)と幕府の戦いを皮切りに戊辰戦争は全国に広がった。東北地方では、仙台・米沢藩を代表とする奥羽越列藩同盟に盛岡藩も参加し、新政府軍と対峙した。途中で脱盟した秋田藩との戦いが繰り広げられ、盛岡藩は秋田藩の支城があった大館(十二所口)へ進軍し、鹿角地域は秋田侵攻の拠点となった。盛岡藩は大館城などで戦闘を繰り広げたが明治元(1868)年11月に降伏した。鹿角地域は盛岡県鹿角郡となったのち、明治2(1869)年8月に九戸県、同年9月に八戸県、さらに三戸県、同年11月に江刺県とめまぐるしく転属し、明治4(1871)年7月の廃藩置県により11月に由利郡とともに秋田県に編入された。

政府の富国強兵策により鉱石採掘や製錬技術の近代化が進められた尾去沢鉱山や小坂鉱山は全国屈指の産出・製錬量となった。同12(1879)年に郡役所が置かれた花輪は、商業地としてさらに発展した。小坂鉱山は黒鉱の製錬技術開発など日本鉱業界に大きな影響をもたらし、鹿角地域への電気の普及、康楽館の建設など近代化を進めた。明治30年代から表面化した小坂鉱山の煙害による農産物・林産物などの被害、昭和11(1936)年11月に発生した尾去沢中沢ダムの決壊など鉱山の発展に伴う弊害も発生した。現在も続けられる鉱山関係者の供養太鼓だった大直利大太鼓(尾去沢地区)はこの災害の供養も行うようになった。高度経済成長期に至るまで経済を支えた尾去沢鉱山は、閉山後史跡尾去沢鉱山と称し観光鉱山として親しまれている。同様に経済を支えた小坂鉱山閉山後の小坂地区は旧小坂鉱山事務所や康楽館といった近代化遺産が観光施設として賑わう。

小坂鉱山製錬所
(小坂地区)

明治41(1908)年に文人大町桂月が訪れて以降観光地となった十和田湖やその探勝基地として栄えた大湯温泉では、大湯五平こけしや大湯木彫人形など観光物産の開発が図られた。湯瀬温泉も昭和6(1931)年の鉄道開通により宿泊場が増え、湯瀬渓谷の景観も相まって多くの著名人が訪れた。現在でも代表的な観光名所の一つである。

産業では、果樹は明治23(1890)年に花輪地区の佐藤要之助がりんご栽培に成功し、東京市場において高値で取引されたことを契機にりんご栽培が果樹栽培の中心となった。さらに煙害に強い果樹として梨が植えられた。現在は、桃や山ぶどうの栽培も盛んに行われ、桃は「北限の桃」としてブランド化され、山ぶどうは地元ワインの原料となっている。ニセアカシアも煙害に強い樹木として明治42(1909)年から小坂地区へ植林が始まり、現在ではその花から採れる蜂蜜が「アカシア蜂蜜」として売り出されている。

また、山に囲まれ豪雪地帯に指定される鹿角地域では、スキー競技が盛んで、国民体育大会(現在は国民スポーツ大会)冬季大会スキー競技会といった全国大会の開催地となっている。

6．人々の暮らし

青垣めぐる鹿角地域は北に十和田湖、南に八幡平をひかえた景勝地であり、古くから恵まれた金属鉱床資源の開発が進み、近代に入っても賑わいをみせた。そのような経済状況が文化に与えた影響も大きかった。

(1)暮らしの風景

鹿角地域の外から様々な人々が訪れ、文献や作品に遺している。

江戸時代には、菅江真澄、古川古松軒、高山彦九郎、菊池武候、船遊亭扇橋、松浦武四郎、上山守古らが立ち寄り、紀行文やスケッチを遺した。近代には、柴田春光が郷里毛馬内(十和田地区)の生活風俗を詩情豊かに描き、『十和田路』は市指定文化財となっている。勝平得之は木彫大湯風俗人形や大湯温泉郷など温泉の絵葉書の制作を行ったのち、郷土秋田の自然や風俗を版画に遺し『大日堂舞楽図』は海外の展覧会に出品された。また、お雇い外国人として日本政府に招かれ来日したクルト・ネットーは、小坂鉱山で冶金技術などの指導にあたるかたわら小坂地区をスケッチに描いた。

注釈8　慶応3(1867)年12月に天皇を中心とした新政府が樹立された。

作業や祝いの場、年中行事などで歌われる民謡には地域の事柄が唄われ、鹿角甚句には「せまいようでも鹿角の里は西も東も黄金の山」とある。

これらからは豊かな自然を背景に情緒あふれる鹿角地域の人々の生活の様子を知ることができる。

(2)人物

交通の要衝であった鹿角地域は、多くの人と文化が交流する地域であり、鹿角地域からも様々な先人が生まれている。

毛馬内町では泉澤織太・恭助・熊之助が三代にわたり私塾を開き、子弟の教育に励み、鹿角地域内外に人材を生み出した。こういった土壌は世界的東洋学者の内藤湖南や、十和田図書館の前身となる立山文庫を創設した立山弟四郎、菅江真澄研究の内田武志・ハチ兄妹、女性民俗学者の瀬川清子を生んだ。

内藤湖南

観光面では、和井内貞行と諏訪冨多がいる。和井内貞行は十和田湖でのヒメマス養殖に成功するなど十和田湖観光の開発に尽力した。諏訪冨多は大湯温泉の観光振興に貢献するほか、大湯環状列石の保存に尽力した。

芸術面では、12代盛岡藩主南部利済に召し抱えられ弘化2(1846)年より藩奥詰絵師を務めた川口月嶺、その門下の田中北嶺などがおり、泉澤家とも親交があったといわれ鹿角地域へ大きな影響をもたらした。近代には奈良裕功、福田豊四郎、柴田春光らが鹿角地域から近代画壇に雄飛した。小林喜代吉、伊勢正義、小泉隆二、相川善一郎らが鹿角地域の芸術の発展に貢献した。

瀬川清子

川口月嶺筆『鶏と牡丹』
(市指定)

福田豊四郎画『山みのる秋』

そのほか、黒澤隆朝や小田島樹人といった作曲家も生まれ、特に小田島樹人は『おもちゃのマーチ』や『山は夕焼け』といった童謡、花輪線開通を記念して『鹿角小唄』の作曲を手掛けた。

(3)伝統行事・まつり

旧村社の祭礼で神輿渡御(みこしとぎょ)が行われるもの、オジナオバナや大太鼓、盆踊などの供養を行うものなど、多彩な伝統行事が受け継がれ、地域の人々が担っている。

伝統行事のほかに、産業振興や地域振興などのため様々なイベントや「まつり」が実行委員会や行政主催で行われる。湯瀬温泉まつりは湯瀬神明社の例祭にあわせて集落で行われてきた。また、近年は道の駅を会場に地域の特産物や郷土料理を販売するイベントが開催され、鹿角市が主催している旬食(しゅんしょく)フェスタや小坂町が事務局を務めるアカシアまつりは、地域外からも多くの来場者が訪れ楽しまれている。

大日堂舞楽
(国指定、八幡平地区)

●主な伝統行事・祭礼

開催月	主な行事
1月	大日堂舞楽(国指定(ユネスコ)・八幡平地区)
2月	土深井裸まいり(市指定・十和田地区末広区域)・雪中田植(小坂地区・八幡平地区)・年祝い(全域)
3月	オジナオバナ(十和田地区(市指定)・花輪地区・八幡平地区(市指定含))・念仏講(百万遍)(十和田地区・花輪地区・尾去沢地区)
4月	花まつり(～5月、小坂地区・花輪地区)・松館天満宮三台山獅子大権現舞(県指定・八幡平地区)
5月	大森親山獅子大権現舞(県指定・尾去沢地区)・山神社祭典(尾去沢地区)
6月	濁川の虫送り(町指定・小坂地区)
7月	月山神社祭礼(十和田地区毛馬内区域)・虫送り(十和田地区・花輪地区・尾去沢地区・八幡平地区)・先祓舞(市指定・八幡平地区)
8月	七夕(全域)・盆踊(全域)・花輪祭の屋台行事(国指定(ユネスコ)・花輪地区花輪区域)・毛馬内の盆踊(国指定(ユネスコ)・十和田地区毛馬内区域)・先祓舞(市指定・八幡平地区)
9月	念仏講(百万遍)(花輪地区・尾去沢地区・八幡平地区)・出羽神社権現舞(小坂地区)・大森親山獅子大権現舞(県指定・尾去沢地区)
10月	
11月	
12月	しめ縄作り(全域)

小豆沢のオジナオバナ
(市指定、八幡平地区)

濁川の虫送り
(町指定、小坂地区)